

「生身の人間」と向き合う合意形成の技術



自然・環境マネジメント研究部 環境計画研究グループ

高田 知紀

知っていること、わかっていること、できることのあいだには大きな差があります。合意形成研究では、いかに「できる」レベルで理論と技術を構築するかがカギとなります。

合意形成の現場では、「生身の人間」が対話・協働しながら、互いに納得できる創造的な提案を模索します。「生身の人間」とは、肉体と感情をもち、移動し、考え、悩み、迷い、ときに間違い、他者に共感できる存在です。合意形成について実践的に研究するために不可欠なのは、実際に対立や紛争のある現場に自分自身もプレイヤーとして参加し、公式・非公式を問わず、さまざまな場で関係者とコミュニケーションを図る作業です。たんにワークショップの進行をするだけでなく、たとえば漁師さんとの合意形成では、漁船に乗せてもらい、船の上からの風景を共有しながらじっくり話を聞いたり、また市民団体の会合に呼ばれて夜遅くまで議論したりしたこともありました。そのような一連のプロセスを経てはじめて、「できる」レベルでの理論や枠組みを見出していくことができます。

対立の発生している現場に身を置いていると「精神的につらくないですか？」と聞かれることがよくあります。わたしはそのような感情はほとんど抱きません。「いい合意形成」が実践できたときには、最初是对立していた人びとが、徐々に言葉を紡ぎ、ともに汗をかき、相互に理解を深めていく場面を目にすることができ、合意形成研究の大きな醍醐味は、現場で、生身の人間が変容していく様子を実感できることだと考えています。



漁師との船上での対話のようす（新潟県佐渡市）